

II 医療機関の課題解決に向けた生成AI活用

1. 診療業務効率化に向けた
生成AI活用榎原 祥裕 岡山旭東病院IT推進センター/情報システム室(法人本部IT戦略室)/
上級医療情報技師

当院は、214床の脳・神経・運動器疾患を専門とする急性期病院である。救急車の受け入れ年間2000件以上、高額医療機器の共同利用など、地域医療支援病院として地域医療に貢献している。生産年齢人口の減少に伴う働き手不足の影響は当院でも出始めており、退職補充などで求人を出しても応募がないなど、今後の労働力確保には危機感を募らせている。海外人材の確保などさまざまな対策がある中で、切り札となるのがDXによる働き方改革である。なかでも2024年に爆発的な普及を見せた生成AIの活用が、病院における業務効率化の点から注目されている。当院でも2024年7月から生成AIを診療業務の効率化ツールとして活用しており、本稿では、具体的な取り組み事例などを報告したい。

IT推進センターの創設
(2021年4月)

当院において、AI活用などさまざまなDXの推進力を生み出しているのが医師、看護師など多職種で構成されるIT推進センターという組織である。病院でもDXという言葉が頻繁に聞かれるようになってきた2021年頃、当院でもDXを推進していこうということで、CIO(最高情報責任者)である筆者が中心となって立ち上げた。部門の枠を超えて、病院の生き残り戦略として、ITを活用した先進的な病院となることをめざし、DXを推進している(表1)。副院長直轄の組織であり、病院の最終意思決定会議である経営会議を活動報告の場と位置づ

けて、スピード感のあるシステム導入ができる体制になっている。

生成AI導入の経緯

当院では全国に先駆けて、2020年からUbie社のAI問診を運用していて、外来待ち時間が1割程度短縮されるなど成果を挙げている。そこで構築した安全な通信経路を使って、同社の「ユビーメディカルナビ生成AI」が利用できるという連絡が、2024年5月頃に営業担当者からあった。今後は病院でもAIの活用が不可欠になると経営陣に説明していた矢先の話だったため、紹介を受けた翌日に臨時の経営会議を招集した。今後の働き手不足を見据え、職員の生成AI活用スキル向上を早期に進める必要があると説明し、経営者から2024年7～12月までの半年間の契約承認を取り付けた。早い段階でノウハウを蓄積することが重要と考え、AIコンサルタント伴走付きでのプロジェクトとした。

システム概要

すでに電子カルテ環境で運用中のクラウドサービスのプラットフォーム上に追加されたサービスを利用した。電子カルテ端末上のブラウザから画面を起動してサービスを利用できるが、電子カルテと生成AIとはシステム上の連動はなく、その部分だけはコピー＆ペーストなど、手作業が必要となっている。通信経路の暗号化、学習機能OFFなど、安全性

表1 各種DXの取り組み

年 月	内 容
2019年4月	Wi-Fi対応インカム導入(外来/病棟/健診)
2019年9月	PHRアプリ「NOBORI」(PSP社)導入
2020年1月	AI問診「Ubie」(Ubie社)導入
2020年6月	スマートフォン問診導入
2021年7月	公式スマホアプリ「旭東San」リリース
2022年4月	遠隔画像共有アプリ「Join」(アルム社)導入
2022年7月	次世代アンチウイルス(NGAV)「Deep Instinct」導入、 モバイルデバイス管理(MDM)「Lanscope」導入
2023年4月	Darktrace社のネットワーク脅威探知ソリューション(NDR)導入
2023年9月	ベッドサイドタブレット「ユカリアタッチ」導入 勤怠管理システム「クロノス/クロッシオン」導入
2024年7月	バックオフィスDX「PCAクラウド/オフィスステーション」導入 CRM「メディグル」導入、ユビー生成AI導入